

世界文学全集

12

死せる魂／検察官／外套

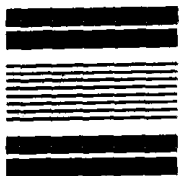
ツルゲーネフ

けむり／はつ恋

中村 融・倉橋 健・横田瑞穂・神西清 訳

河出書房

© 1969



カラー版 世界文学全集 第12巻

ゴーゴリ 死せる魂 検察官 外套

ツルゲーネフ けむり はつ恋

昭和 44 年 2 月 20 日初版印刷

昭和 44 年 2 月 25 日初版発行

訳 者
中 村 融
倉 橋 健
横 田 瑞 穂
神 西 清

装幀者 亀倉雄策

発行者 中島隆之

印刷者 澤村嘉一

印 刷 凸版印刷株式会社

発行所 株式会社 河出書房新社

定 価 750 円

製 本・加藤製本株式会社
製 函・加藤製函印刷株式会社
本文用紙・三菱製紙株式会社
表 紙・日本クロス工業株式会社

東京都千代田区神田小川町 3 の 6

電話 東京 (292) 3711 (大代表)・振替口座 東京10802

目 次

ゴ ー ゴ リ／ツルゲーネフ

死せる魂 第一部	3
検 察 官	173
外 套	233
け む り	259
は つ 恋	391
訳 注	441
年 表	444
解 説	457

巻頭口絵 ゴーゴリ肖像（右）

F・A・モレル筆（1841年）

ツルゲーネフ肖像（左）

K・E・マコーフスキイ筆（APN特写）

本文カラーさし絵

ククルイニークスイ

ピョートル・ソコロフ

D・N・カルドーフスキイ

A・I・コンスタンチーノフスキイ

チャールス・ミコライチャック

©1969 Charles Mikolaycak

装 幀 亀倉雄策

死せる魂
(長編叙事詩) 第一部

——チーチコフの道中奇譚——

中村融 訳

主要人物

チーチコフ（バーウェル・イワーノヴィッチ）本編の主人公。

ロシアの田舎をまわり歩き、実際には死んでいるが戸籍上は生きてることになっている農奴を地主から買いあつめ、これを担保に銀行から金を借り出そうとたくらむ。

マニローフ

サバケーヴィッチ

ノズドリョフ

ブリューシキン

カローボチカ（女）

セリファン 御者。

ベトルーシカ 下男。

地主。

裁判所長、郵便局長、警察署長、知事など。

第1章

ある県庁所在地の宿屋の門内へ、小型ながらもなかなかりっぱな、バネつきのフリーチカ（四輪馬車）が乗り込んで来た。こんなのを乗り回すのは独身者の連中で、それも退役陸軍中佐とか、二等大尉とか、さしては農奴の百人もかかえていようという地主とか——つまりてっ取り早く言えば、中流どころの旦那衆である。馬車の中には一人の紳士が乗っていたが、別に美男子でもなければ、さりとて醜男（みにくおとこ）というのでもなく、肥りすぎても痩せすぎてもいず、老けているとも言えないが、きりとて大して若いほうでもなかった。この男が到来したからとて町には全然これといった騒ぎも起こらなければ、別段なんのへんてつもなかった。ただ宿屋と筋向かいの居酒屋の戸口に突っ立っていたロシヤ人の百姓が二人、なにやらぼそぼそつぶやいていたが、それも当の車中の客人よりはむしろ馬車についての話だった。「どうだ——と、一人が相手に言った——なかなかおつな車でねえか！ おめえの考えじゃどうだ、ひとつ間違ったらあの車ならモスクワまで行きつけるか、それとも行きつけねえか？」——「行きつけるとも」と相手は答えた。——「なら、カザンまじや無理だと思ふが、どうだ？」——「カザンまじや無理だな」と相手。これで話はもうすんでしまった。それともう一つ、馬車が宿屋へ乗り込んだときにそこで出合いがしらに顔

を合わせたのは、おつそろしく細くて短い綿木綿（しんぼくめん）の白ズボンに流行をとり入れた燕尾服（たんびふく）といういでたちで、下からはブロンズ（青銅）のピストル型の飾りがついたトゥーラ出来のビンでとめたシャツの胸当てをのぞかせていた若い男だった。この若者も途端に後ろを振り返ってちらっと馬車を見やしたが、危うく吹き飛ばされそうになった縁無し帽を片手で押えると、そのままさっさと行ってしまった。

さて中庭へと馬車を乗り入れると、紳士は、宿屋の給仕というか、あるいはこれがロシヤの料亭あたりでよくいう「バラヴォイ」（床拭き）（意）というのか、ともかくきびきびと威勢のいい、顔の見分けもつかぬほどによく動き回る男に出迎えられた。その男はナフキン片手にすばやく走り出て来たのだが、これがまたのっぽの上（うへ）にうしろ襟（きん）が首筋にまで届きそうなぞろ長い、半木綿のフロックを着込んでいて、髪をさつとひと振りすると、さしずめあいている部屋を見せに、さっさと板張りの廊下づたいに二階へとこの紳士を案内して行った。部屋といつてもありふれたもので、それもそのはず、なにしろ宿屋そのものにしてからが同じくありふれた、つまり、地方都市などにざらにあるやつで、客は一日二ループ（二回）も出せば静かな部屋をあてがわれはするが、その部屋というのがまた隅々（すみずみ）からスモモのような油虫（あぶらむし）がちよろちよろ顔を出したり、隣室へのドアはいつもたんずでふさいであるというものの、その向こうには、黙り者で物静かな、そのくせ恐ろしく物好きで、新米の客の動静を細大（こほろ）もろさず知ることに興味をもつ客も陣どつていようというわけなのである。宿の正面の見てくれもまた実に中味（なまぐさ）にふさわしかった——それは二階建ての途方もなく長い建物で階下のほうは漆喰（しつこく）すら塗（ぬ）ってなくてどす黒い赤れんがのままだったが、そのれんががたるやまた、元来（もとより）があまりきれいなほうではなかった上に、性（しやう）悪（あく）な天候（てんこう）の変化（へんか）をうけていよいよもってどす黒くなっている。二階は二階でこれも相も変わらぬ黄色いペンキ塗りで、階下（かいげ）には馬の頸圈（くびくわ）だの、縄（なわ）だの、輪（わ）パンなどの売店（うりみせ）が立ちならんでいた。そうした売店（うりみせ）の中の一ばんすみっここの店、というより窓の中には一人の蜜湯（みつとう）売りが控

えていたが、これがそばに赤銅のサモワールを置いて、自分もサモワールそっくりの赤ら顔をさらしているの、もし片方のサモワールがタールそっくりの黒いあごひげをつけていなかったら、遠目には二個のサモワールが窓に並んでいると思われたかもしれない。

旅の紳士が自分の部屋を見回している間にその荷物が運びこまれて来た——まず第一には、だいぶ古びていて、旅は初めてではないぞと言わんばかりの白革のトランク。このトランクを運んで来たのは、皮外套を着た小柄な御者のセリファンと従僕のベトルーシカで、このほうはひと目で旦那のお下がりと思われる古ぼけてだぶだぶのフロックを着た、唇と鼻のえらく大きい、どことなくがさつ者らしい三十がらみの若者だった。トランクに次いで持ち込まれたのは木理のある白樺で嵌木細工にしたマホガニイの小形な手箱やら、長靴の木型やら、青い紙にくるんだ鶏の丸焼きやらだった。こうしたものが残らず運びこまれてしまうと、御者のセリファンは馬の始末に厩舎へ出かけ、従僕のベトルーシカは小さな控え室、というよりおっそろしく暗い犬小屋みたいなところに着く算段をはじめたが、そこへはもうちゃんといつの間にか自分の外套と、それに伴う彼独特の臭気とが持ち込んであって、その臭気は続いて運び込まれた従僕の雑多な手回り品を入れた袋からもそれと察しがつくのだった。この犬小屋では、彼はうまく宿の主人からせしめて来た、まるで揚げせんべいみたいにカチカチでべしゅんこで、その上ひょっとするとこれも揚げせんべいみたいに油じみているかもしれない小さな敷きぶとんまがいのものを幅のせまい三本脚の寝台に敷くと、そいつを壁ぎわに寄せてすえつけた。

召使たちが何かと片づけものをしたり、ごそごそやったりしている間に、紳士はホールへ出かけて行った。この種のホールがどんなものであるかは——旅の経験のある人なら、だれでも知りすぎるほど知っている——ご多分にもれぬペンキ塗りで、上のほうは煙草の煙で黒くくすぶり、下のほうはいろんな旅人たちの、ことに土地の商人たちの——というのは商人たちは市日には六人連れ七人連れでここへ来ては

きまってお茶の二杯ずつも飲んで行くからで——背中ではテラテラに光ってしまっている相も変わらぬ壁。それからこれも同じくくすぶった例の天井に、ガラス玉がたぐさんぶらさがっている同じようにくすぶった例の釣燭台だが、そのガラス玉は床拭きが海辺の鳥のように無数の茶わんをのせた盆を威勢よく振り回しながらすり切れた床の油布の上を走りまわるたびに、踊ったり、鳴ったりするのだ。それから壁という壁に掛け並べられた、きまりきった油絵。つまりどこにもさらに見かけられようという代物ばかりで、ただ強いて異色といえば、中で一枚の絵に、読者もおそらくついぞ見られたこともないほどの大きな乳房をした水精が描かれてあることぐらいなものであった。もったもこうした自然のいたずらは、いつどこからだれの手でわがロシアの地へ持ち込まれたのかちょっとわからないような、といっても中には芸術愛好の士たるわが国の貴族たちが案内人の口車に乗って、イタリイあたりで背負いこまされて来た代物もあるにはあるのだが、とにかくそうしたいろいろの歴史画の中によく見られるものなのだ。さて、紳士は縁無し帽をぬぎ、虹色をした毛編みの襟巻を首からほどいた。いったいこんな襟巻きは、女房持ちなら細君が手ずから編んでくれて、巻きかたまでちゃんと教えてくれるものなのだが、ひとり者には果たしてだれがこしらえてくれるものやら、そのへんのところは作者にもしかとはわからない。神のみぞ知ろしめすと言うほかはあるまい、なにしろ作者はそんな襟巻きなどはついぞ一度も巻いたためしがないのだから。襟巻きをとって終えようと、紳士は食事を出すように言いつけた。そしてこうした宿屋でのおきまり料理、つまり、お客を見越してことさら数週間もしまい込んでおいた軽焼きビロークを添えたシチュウとか、豌豆入りの脳味噌料理とか、キャベツをつけ合わせたソーセージとか、去勢鶏の焙肉とか、塩漬の胡瓜とか、いつでも出せるように用意してある甘い軽焼きビロークとか、そういったものの暖め直しや冷たいままのが次々と出される間に、彼は給仕、つまり例の床拭きをつかまえて、以前はだれがこの宿を経営していたかとか、今は

だれがやっているとか、収益は多いとか、おまえたちの主人はひどくいけ好かないやつじゃないとか、愚にもつかぬことをいろいろと詰問したが、それに対して床拭きは、これもおきまりのことだが、「へえ、旦那さま、そりやもう大した騙りでございますよ」と答えたものだ。文明開化のヨーロッパと同じく、文明開化のロシアでも、こんなにでは給仕相手に話をしたり、時にはおもしろ半分には彼らをからかったりしないでは、料亭で食事ができぬというお偉らがたがなかなかどっさりいらせられるのである。とは言うものの、この旅客は決して下らぬ質問ばかりしていたわけではなく——この市にいる知事はだれか、裁判所長はだれか、検事はだれかということも恐ろしく念入りに聞きだした。つまり、役人もお歴々のところは一人ものかきなかつたわけのだが、なおそれにもまして根掘り葉掘りに、まんざら単なる興味からばかりでもないらしい身の入方でおもな地主たちの残らずについて、いろいろと事もこまかに問いた——だれはどのくらい農奴をかかえているか、市からどれほど離れたところに住んでいるか、どんな性質の男か、市へはたびたび出て来るか、といったふうには。また地方の状態についても注意深く尋ねた——たとえばこの県下には流行性の熱病だとか、命とりのおこりだとか、天然痘だとか、そういうったような疫病はなかったかということ、それも単なる好奇心以上のものを示す克明さで、詮索するのだった。紳士はその物腰の中になんとなくがっかりしたところをもっていて、時々ものすごい音をたてて鼻をかんた。どうしたらこんな音が出るのか、そのところはわからないが、ともかく彼の鼻はラッパのような音を立てるのだった。ところでこの一見、まったく邪気のない威厳がかえって宿の給仕には多くの尊敬を感じさせたものらしく、そのためにこの響きが聞こえるたびに、給仕は髪を振り上げるといっそううやうやく直立し、高みから頭をこめて「なにかご用では？」と尋ねるのだった。食事がすむと、紳士はコーヒを一杯飲み、長椅子に腰をおろしてクッションに背をあてたが、このクッションなるものがまた、ロシアの宿屋

に備えつけのと来たら、ふかふかした毛の代わりに、なにかれんがが小石みたいなえたいの知れぬものが詰め込んであるのだ。でも間もなくあくびが出て来たので、彼はさっそうく部屋へ案内するように命じ、そこで横になると、二時間ばかりぐっすりと眠った。ひと休みすると、彼は宿の給仕の需めに応じて、型のごとく警察へ届け出るために、紙きれに官等氏名を書きつけた。床拭きは、階段をおりながら、それを一字一字と次のように拾い読みした——「六等官、バーウエル・イワーノヴィッチ・チーチコフ。地主。私用にて投宿」床拭きがまだ一字一字を拾ってそれを読みわけている間に、当のバーウエル・イワーノヴィッチ・チーチコフはもう市の見物に出かけて行ったが、どうやら彼はこの市に満足させられたらしかった。というのも、この市が他の県庁所在地の市に比べていささかも遜色のないことがわかったからで、つまり、石造り家屋の黄色ペンキは強く目を射たし、木造家屋の灰色ペンキは慎ましやかにくすんでいたからである。家屋は平屋と二階建てと、それにもう一つ県下の建築家連の意見では優美この上なしということになっている中二階を造りつけた一階半建てとであった。場所によってはこれらの家々は、野原のようにだだっ広い街路と、はてしない木の柵の中に置き忘れられたようにも見え、また所によつては、ひとかたまりにごちゃごちゃと集まり、そこでは人や動物の動きがいっそう目立って見えるのであった。ビスケットや長靴の看板が雨でほとんど洗い流されたようになっていゝるのも目にとまり、中には青スボンの絵にアルシャワ（ワルシャワの）の裁縫師何某などと署名入りのあれば、縁無し帽や大黒帽の絵に「外国人ワシリー・イ・フォードロフ」（純粋にロシア名まえのに外国人と）と書いたものもあり、かと思えばまた、わが国の劇場あたりで最後の幕になるときまつて舞台へのし上がって来る客の着ているような燕尾服を着込んだ二人の遊戯者が撞球をしているところを描いたものなどもあり、その遊戯者がキューでねらいをつけ、両手をちよつとうしろへひいて足を斜にかまえたところは、ちょうど今しがた空中でとんぱ返りをやったばかり

りというかつこうである。こうした看板の下にはどれにもみな「ここがその店です」と書かれてあった。またそこらの路上にいきなりテーブルをすえて、胡桃とか、石鹼とか、石鹼そっくりの生薑パンなどを並べているのもあれば、丸々とふとった魚にフォークを突き刺した絵看板を掲げた飯屋もあった。そうした中で一ばんちよいちよい目に触れたのは、汚れた双頭の鷲の御紋章で、これは当今では至極あつさり「飲み屋」と塗りかえられてしまっている。(酒類は政府の専売であるためその販賣所には帝室の紋章を掲げたる) 舗道はどこもお粗末だった。彼は公園もちよつとのぞいてみたが、ここにあるものは根つきの悪い、ひよろひよるの木ばかりで、根もとを三角形の支柱でささえられていたが、緑のペンキで塗り上げられたその支柱のほうがいっそはるかに見事なくらいのものだった。もつともこんな蘆ほどの丈もない樹木でも、かつて新聞にイリュミネーションのことが報道されたおりに、次のように書き立てられたこともあった——「わが市は今や市当局の尽力によって公園をもつて飾られるに至り、その鬱蒼と緑濃き樹木は炎暑の候に一段の涼味を与えつゝあり」そしてさらに曰く「市民の心が感謝に溢れて打ちふるえ、市長閣下に対する随喜感佩の涙の滝のごとく流るるを見るは、誠に感激にたえざるところなり」つぎに彼はもし必要の際、中央寺院や、諸官庁や、知事の官舎へはどう行ったら一ばん近いか、とそんなことまで詳しく巡査に尋ねてから、市の中央を流れている川を見に行ったが、そのみちみち柱にはりつけてあるビラを、宿へもどつてからよく読みなおすつもりではぎとったり、片手に包みをささげた軍服型のお仕着せ姿のボーイを従えて板敷きの歩道を通りすぎる眉目うるわしい婦人をしげしげとながめたり、そして最後にもう一度市の様子をよく覚え込んでおこうとでもするように、あたり一帯に目をさらしてから、まっすぐ家路につき、宿の給仕に軽くひじをささせられて階段を上がつて自分の部屋へとはいった。鰯腹お茶を飲み終えると彼はテーブルの前に腰をおろし、ろうそくをもつて来させるように命じて、ポケットからさっきのビラを取り出すと、灯りの方へ近づけて、右の目を心もち

細めながら読みはじめた。けれどもそのビラには別段、注意に値するようなことは書いてなく——コツエブー(一七六——一八二)の芝居が上演され、ロールの役はポブリョーヴィン氏、コーラはジャープロブ嬢で、他の役は特に取り立てて言うほどのことはない、とただそれだけのことであったが、それでも彼はそれをすっかり読みとおして、平土間の料金まで調べ、そのビラが県庁の印刷所で印刷されたことまで知り、さらにまだ裏にも何か書いてないかとひっくり返してみたが、何もなかったで、目をこすり、それをきれいに巻くと、手にはいったものは何でも入れておく習慣になっていた自分の手文庫へしまつてしまった。かくしてその一日は、積の冷肉一皿と一本のすっぱいクワスと、それに広大なロシア国のある地方の言いぐさで言えば、轡を一ぱいに開いたほどのすさまじいびき声を伴う熟睡とでどうやらけりがついた模様である。

次の日は終日訪問に費やされた。すなわち、客は市の高官連を残らず訪問に出かけたのである。まず知事をたずねて敬意を表したが、会ってみると、これは当のチーチコフ同様にふとつても瘦せてもいず、首にはアンナ勲章をぶらさげていて、なお近く星形勲章までもらうことになっているという噂の人物だった。そのくせ、すこぶるつきのお人よしで、どうかすると自分でレースの刺繍までやつたりした。次いで彼は副知事のところへ回り、それから検事、裁判所長、警察署長、専売官、官営工場長官といったぐあいに……。もちろん、こんなふうでこの世の有力者たちを一人残らず数え立てるのは残念ながらちよつと無理な話だが、ともかくこの旅人が訪問にかけては、ひとかたならぬ活躍ぶりを見せたと言えはじゅうぶんであろう——なにしろ彼は医務局監督官や市の建築技師のところへまで敬意を表しに伺候したのだから。なおそれから彼はまだ長いこと馬車に乗ってからも、もつとだれか訪問しておく人はなかったかとしきりに考えたが、もうこの市には他には役人は一人も居なかった。こうした有力者たちとの座談の間に彼は実に巧みにその一人一人に取り入つてしまった。知事に向か

つては、この県へ来るとまるで天国のようで、道路という道路はどこへ行ってもさながらピロードのようだとか、こういう賢明な大官を任命した政府は絶賛に値するとかいうようなことをそれとなくほめかした。警察署長には市の巡査のことで何やらとてもうまいれしがらせを言ったし、まだどちらもや々と五等官に過ぎない副知事と裁判所長に対しては談話の間にわざと間違えて、二度までも「閣下」と呼んだりしてひどく彼らを喜ばせた。(閣下は三、四等文官に對する敬稱)この結果、知事はさっそくその晩の内輪の夜会にぜひとも御来駕いただきたいと彼を招待したし、ほかの役人たちもそれぞれ、ある者は午餐に、ある者はボストン遊び(カルタの一種)に、ある者はお茶にと彼を招いた。

ところで旅人は自分のこととなるとあまり語りたがらないようなふうで、話すにしても、ひどく慎ましやかにどっちつかずのことを言うだけで、そんな場合の彼の話しぶりはやや文章がかった口調になった。たとえば、自分はこの世ではまったくなんの意味もない蛆虫で、とうてい、人様のご心配をいただくだけの価値のない者であるとか、しかし生涯の間にはさまざまな経験もつみ、官途についていたころには、正義のためにはずいぶんつらい辛抱もして、命までねらうような敵もたくさんもっていたとか、今では落ち着いて暮らしたいと思つて、最後の安住の地を探し歩いているのだとか、さればこそこの市へ着くとすぐ錚々たる大官連に敬意を表するのを第一の義務と考えたものである、とかいったふうにな。さて以上がその晩さっそく、知事の夜会に出席することを怠らなかつたこの新来の人物について市の人々が知り得たすべてだった。この夜会に出る支度には、優に二時間余りの時間が費やされたが、ここでもこの旅人はどこへ行ってもちよつと見られぬほどに念入りな身ごしらえ振りを示したものだ。中食後にちよつとひと眠りすると、彼はまず洗面の用意を命じ、内側から舌でつっぱりながら、恐ろしく長くかかって石鹼で両頬をこすつた。それから宿の給仕の肩からタオルをとると、相手の鼻さきで二度ばかりブルブルと鼻嵐を吹いてから、そのまんまな顔を耳の後ろからはじめ

て四方八方から丹念に拭き上げた。次に鏡の前で胸当てをつけ、鼻の穴からのぞいていた二本の鼻毛を引き抜くと、即座にピカピカ光るこけもも色の燕尾服を一着に及んだ。こうして身じまいをすまずと、彼は自家用の馬車に乗り込んであちこちにちらちらしている窓々からわずかにみれる灯影にぼんやり照らしだされている限りもなくだっ広い街路を揺られて行つた。が、知事の邸は、いかに舞踏会のためとはいえ、いかにも明るく煌々としていた。角燈をつけた幾台もの馬車、車寄せの前の二人の憲兵、遠くで聞こえる御者の叫び声——つまり、必要な道具立ては全部そろつていたのである。ホールに足を踏み入れたとたん、チーチコフはちよつとの間、目をしかめないではいられなかつた。それほど蠟燭や、ランプや、婦人たちの衣装のきらめきがすさまじかつたのである。なにもかもが光に満ちあふれていた。黒の燕尾服は、離れた固まりたりしては、チラつきながら動いていたが、それはちょうど夏の暑いさかりに、年とつた女中頭が開け放した窓ぎわで、チカチカ光る粉末に打ち砕いている真っ白に輝く砂糖の山に蠅がたかっているようだった。子どもたちはみんなその周りに輪をつくつて、槌を振り上げる彼女のいかつい手つきを物珍しげにながめているが、軽い風に乗って舞い上がった蠅の空軍はわが物顔にしゃあしゃあと飛び込んで来ては、老婆の視力の弱さとその目を眩ます陽の光を利用して、このおいしいごちそうを、バラバラの粉やころころの塊りにして方々へまき散らしている。ところで豊饒な夏季を満喫してそれでなくてはさへ一足ごとに珍味にありついている彼らがこうして飛び回っているのは、決してこれを食べるのが目的ではなくて、ただ自分を見せびらかすため、つまり、砂糖の堆の上を飛び回つたり、前脚なり後脚なりの片方を他の一方にすりつけたり、それで翅の下を掻いてみたり、両の前脚を延ばして頭の上ですり合わせたり、くると宙返りをして飛び去ったり、かと思ふとまた新しくうるさい中隊を編成して飛来したりするためにほかならないのだ。さて、チーチコフはまだろくすっぽあたりを見回すひまもないうちに、もう知事に

腕をとられて、いち早くその場で知事夫人に紹介された。客はここでも自分の品位を落とすようなことはせず、お世辞めいたことも何やら言いはしたが、それも身分の大してよくもなければ悪くもない年配の男としては至極板についたものであった。相手のきまった幾つかの踊りの組が一座の人々を壁ぎわへ押しつけてしまった時、彼は両手を後ろに組んで、ものの二分間ばかりばかりに注意深くその連中をながめやっていた。婦人連は多くりつぱな、それも流行の衣装をつけていたが、中にはこの県庁所在地の市で間に合わせたような装いをしてる者もあった。男のほうは、どこでもそうだが、ここでも二た種類に分かれていて——一方は瘦せっぽちの組で、この連中はのべつ婦人連の尻ばかり追い回して、そのうちの二、三の者などは、ちょっとベテルブルグ人士と見分けもつきかねるほどで、つまり、ベテルブルグで見かけるのとそっくりに、いやに念入りに気取った櫛の入れ方をした頬ひげをはやすか、さもなければ、卵型のきれいな顔を見事につるつるに刺るかして、これまた同じようにだらしなく婦人連にへばりついたり、フランス語でしゃべったり、彼女たちを笑わせる手合いだった。いま一つの組、それは肥った連中か、さもなければチーチコフのように肥りすぎても瘦せすぎてもいないという仲間だった。この連中は前者とは反対に、婦人のほうは横目で見やっただけで敬遠してしまつて、それよりもただ知事の邸の召使がどこかにホイススト(遊び)用の緑色のテーブルをすえはしまいかと、ただもうきよきよ方々を見回すほうに余念がなかった。この連中の顔は、ぼてぼてと肥つてまろく、中には疣のある者や、時にはあばた面のもいて、頭髮も前髪を立てたり、巻き髪にしたりはせず、さりとてフランス人たちのいわゆる「勝手にしやがれ」式でもなく、思い切つて短く刈り込むか、びったりなでつけるかしているもので、顔つきはいよいよ丸くがっしりして見えるのだった。これは市のおえらがたの役人たちだった。ところで、どういふものかこの世では肥つちよ連のほうに瘦せっぽちより仕事(し)ぶりが一段とあざやかである。瘦せっぽちの勤めなんぞは多く

はほんの囁託か、さもなければただ頭数に入れてもらつてあちこち尻尾を振り歩いているだけのことで、その存在たるや余りに軽く、空気にみたくにふわふわで、たのもしからぬことおびたらしい。そこへ行くと思つた連中のほうは閑職につくなどということとは金輪際なく、いつもちゃんと真つ当の地位を占めるし、また、一たんどこかに腰をおろすとなれば、そのすわり振りがまことにたのもしく、どっしりしているもので、かえつて地位のほうが顔負けして悲鳴をあげ、彼らの尻の下でめり込んでしまふくらいなのだが、それでも彼らは、いっかな動こうとはしない。見かけだけのきらびやかさなどは彼らの好むところではない。燕尾服にしても、彼らは瘦せっぽち連のほどすっきり仕立ててはいないけれども、その代わりふところの中はお宝でいっぱいだ。瘦せっぽちのほうは三年もたてば、借金の抵当に置かない農奴なんぞは一人もなくなつてしまふが、肥つちよのほうはじつと見ていると——まず郊外あたりに細君名義で買入れた家が現われ、次いで別の町はずれに別の家がで、市の近在の村が手にはいり、やがては森から畑からそっくりついた村が、わがものとなるといったぐあいである。そしてどのつまりは、この肥った連中は、神と陛下に対する勤めを終え、世間一般の尊敬を勝ち得てしまふと、そこでめでたく職を退いて浮世を離れ、地主となり、光榮あるロシヤの旦那衆となり、お客好きの好々爺となつて安楽に余生を送るというわけになるのである。ところが、そのあと目にはまたしても瘦せっぽちの二代目が現われて、こいつがまたロシヤのならわしどおり、あれよあれよという間にたちまちにして親父の身上をすつてしまふのである。ざつとこんなふうの想念が、一座の人々を見回した際にチーチコフの心を占めたこととおおおくもなく、そんなことから彼はけっきょく肥った連中の仲間に加つたのだつたが、そこには彼の見知り越しの顔がほとんど全部そろつていた——恐ろしく真黒な毛虫眉毛の持ち主で、「おい君、あっちの部屋へ行こう、ちょっと話があるんだ」とでも言いたげに左の目でいくらか目配せみたいなことをする、そのくせまじめで口数の

少ない検事。背こそ低い、皮肉屋で哲学者^{さつがくしや}肌の郵便局長。なかなか思慮^{しよ}深くても愛想の好い人柄の裁判所長——こうした連中が彼をまるで古馴染^{ふるなじみ}のように迎えてくれたのだが、それに対するチーチコフのあいさつぶりは、ややそっぽを向いてはいたものの、まんざらうれしそうでなくもなかった。そこでまた彼は、きわめて愛想がよくて腰の低いマニローフという地主や、初対面からいきなり彼の足を踏んづけておいて「いや、こいつは真っ平、真っ平」といった調子のサバケーヴィッチという男とも懇意になった。なおここでは、さっそくホイスト遊びのカルタをも手に押し込まれたが、これも彼は例のいんぎんなお辞儀といっしょに受け取った。彼らは緑のテーブルに向かつて腰をおろし、そしてそのままでもう晩餐^{ばんさん}まで席を立とうとはしなかった。座談も、人が仕事に打ち込んでしまうとよくあるように、すっかり影をひそめてしまった。郵便局長は元来なかなかの口達者なのだが、それでも一たんカルタを手にしたが最後、たちまちその顔に考え深そうな表情を浮かべ、下唇^{くみずみ}で上唇^{かみずみ}をおさえてしまつて、勝負の間ずっとそのかっこうをしつづけていた。が、絵札で行くときには、彼は片手でどんとテーブルをたたいて、それがクインだと「えい！ おいはれの梵妻^{ぼんさい}め！」と言い、キングだと「えい、タンボフの土百姓め！」とわめくのだつた。すると裁判所長は裁判所長で——「では、わしがそやつのおひげをおさえてくれる！ では、わしがそやつめのおひげをおさえてくれる！」とこう言う。ほかにもどうかするとカルタをテーブルにたたきつけながら「えい！ ぞ！ どうともなりやがれ、しかたがねえからダイヤから行くか！」などと言つたり、かと思つとばかにあつさり「ハートだ！ ハー助だ！ スベ公だ！」とか「スベつちよだ！ スベちよこだ！ スベちよりんだ！」とか、あるいはもっと簡単に「スベだ！」などという掛け声をわれ知らず口に出すのだつたが、これはいづれも彼らが仲間同士の間で札を祝福する際に用いる名称なのである。勝負が終わると、いつもの伝でかなり大声の議論が行なわれた。われらの客人もやはり議論の仲間入りはした

が、それがいかにも水ぎわ立っていたので、一座の連中は、この男は議論もなかなか達者だが、渡り合いがいかにも垢抜けがしているわい、と感心したものだ。彼は決して「やりましたね」などとは言わないで、「おやりになりましたね、では一つここであなたの二点を殺させていただきますようか」といった調子でやる。なお、なかで相手を同意させようとする場合には、彼はきまつて、だれかれなしにエナメル塗りの銀のたばこ入れを差し出したが、その底には匂いを添えるためにすみれの花が二輪、ちゃんとしのばせてあるのが目についた。ところで、この旅の客人の注意を特にひいたのは、さきに述べた地主のマニローフとサバケーヴィッチの二人であつた。彼は裁判所長と郵便局長とにちよつとわきの方へ来てもらつて、さっそくその場で二人のことを聞きただした。この時彼の口から出た幾つかの質問はこの客人の肚^{はら}が單なる好奇心ばかりではなく、なにか期するところがあることを示していた。というのも、彼はまずもつて二人のかかえている農奴の数とその領地の状態とを尋ねてから、そのあとではじめてその名と父称とをただしたからである。そして彼はその後わずかの間にこの二人を完全に自家^{みづか}業^{ごう}籠^{かご}中のものとしてしまつた。地主のマニローフはまださほどの年配でもなく、砂糖のように甘い目つきをして、笑うたばにそれを糸のように細める男だつたが、これがたちまち彼に現を抜かしてしまつた。マニローフはいつまでもいつまでも彼の手を握つたまま、どうぞ自分の村へもぜひ御来駕^{ごらいが}の栄を賜りたいとしきりに懇願した。その村までは彼の言葉によると、市の関門から僅々十五露里ほどしかないということだつた。これに対してチーチコフは、いともいんぎんな会釈と心からなる握手とともに自分は大喜びでそれを履行させていただきたいと思つてゐるばかりでなく、それを神聖^{しんせい}の上もな義務とさえ考へてゐるという旨を答えた。サバケーヴィッチも同様、いささか言葉少なではあつたが、「手前どもへもどうぞ」こう言いがま、途方もなく大きな長靴をはいた足をちよつと後ろへひいて札をしたが、こんな靴に合う足などというものはちよつとどこへ行つて

もおいそれと見つかる代物ではあるまい、ことに近ごろのロシアのよう
うに大男が少なくなりつつあるご時勢では。

翌日、チーチコフは今度は警察署長邸の午餐と夜会に出かけて行
き、そこでは午後の三時からホイストのテーブルにすわり出して、と
うとう夜中の二時までやり通した。といっても、この間にも彼はそこ
でノズドリョフという地主と懇意になったが、これは三十がらみの威
勢のいい男で、二言か三言話すうちにもう「きみ、ぼく」でやりだし
て来た。このノズドリョフは警察署長や検事とも同じく「きみ、ぼ
く」の友だちづき合いをしていた。だが、いったん大きな勝負の席に
ついたとなると、警察署長も検事も恐ろしく注意深く彼の負け札を見
張り、この男の出す札にはほとんどその一枚一枚に目を皿にして気を
配るのだった。その翌日、チーチコフは裁判所長の宅で一夜を過し
たが、所長は客に應對するというのに、しかもその客の中には二人の
婦人さえまじっていたのに、少し脂垢じみたガウンのままの装りだっ
た。それからなお彼は副知事の夜会、専売官の大午餐会、検事邸の小
午餐会——これは、しかし大午餐会の値うちがあった——などへも顔
を出した。また市長によつて催された祈禱後のお茶の会へも出たが、
これもやはり午餐会ぐらいの値うちはあった。こんなふうで、一口に
言えば、彼は家にじっとしている時などは一時間もなく、宿へもどる
のもただ寝るだけというありさまだった。この旅の客は万事につけて
如才なく立ち回り、いかにもいっぱし経験をつんで世故なれた人物ら
しいところを見せた。どんな話が出て彼はいつもうまく調子を合わ
すことができた——養馬場の話が出れば養馬場の話をするし、いい犬
の話になればそれにもなかなか適切な言葉を吐くし、裁判所の審理の
ことで議論が始まれば——裁判上の掛け引きにも暗くないところを示
すし、撞球が話題になれば——そのほうでもへまな口はきかないし、
慈善のこととなれば——それについても両眼に涙をたたえてけっこ
うりっぱな意見を述べ立てるし、濁酒の製法に話が向けば——そのこ
とでも彼はうまいこつを心得ているし、税関の監視や役人の話になれ

ばなつたで、これまたまるで自分が役人か、監視でもあったかのよ
うにその批評をするのだった。しかもここに注目すべきは、彼がすべ
てこうした話に、ある一種のまじめな調子をあたえつつりっぱに身を
持して行くことができたということである。話し声からして高からず
低からず、全くころ合いの声だった。つまり、これはどこへ出しても
実にそのない人間だったということになる。役人たちはいづれもこ
の新しい人物の到来に満足だった。知事は彼を評して、なかなかよく
できた人柄だといひ、検事は、有能の士だと称し、憲兵大佐は、学者
だときめこみ、裁判所長は、物知りで尊敬すべき人物だといひ、警察
署長は、尊敬すべき愛想のいい男だとほめ、署長夫人は、珍しく如才
のない、とてもあたりの柔らかな方と称した。他人のこととなるとめ
ったによく言ったためしのないサバケーウィッチまでが、かなりおそ
く市からもどつて来ると、すっかり服を脱いで、やせた細君のかたわ
らへもぐりこむや、さっそくこう話しかけたくらいだった——「なあ
おい、今日はおれ、知事の夜会と署長の午餐会に出て、そこで六等官
のパウエル・イワーノヴィッチ・チーチコフと男と知り合いにな
ったがね、とても気持ちのいい男さ——これに対して細君は「フン！」
と答えたきりで、片足で彼を一つとんと小突いた。

こうした、客人にとっては、はなはだ喜ばしい評判は市じゅうにひ
ろまり、そしてこの評判はやがて読者諸君も知られるであらうこの客
のある奇怪な特性と、同時にたくらみというか、あるいは田舎などで
よくいう「やまこ」というのか、ともかくそうしたものによつてほと
んど市じゅうが狐につままれたようになってしまふまでずっと続いて
行つたのである。

第2章

こんなふうにして、この旅の紳士はやれ夜会だ、やれ午餐会だと方
方へ出歩いて、いわば心うきうきと時をすごしながら、すでに一週間

以上もこの市に滞在していた。そしてそのあげくには訪問の手をさらに郊外にまでのぼして、かねての約束どおり地主のマニローフとサバケーウィッチを訪ねることにした。もっとも彼がこんな決心をするに至ったのは、あるいはほかにもっと本質的な理由、つまり、もっと真剣で切実な事情がひそんでいたのかもしれない……がしかし、こんなことはみんな読者諸君が我慢してこの物語を読みとおしてくださいさえすれば自然とわかつて行くことなのだが、何しろこの物語は恐ろしく長くて、めでたく終局に近づくにつれ、いよいよもって規模の広大さを加えて行くのだから、くれぐれもそのつもりをお願いしたい。さて、御者のセリファンには、朝早くから例の半蓋馬車をつけよとの命令が下され、ペトルーシカは、宿に残って部屋とトランクの番をせよと申し渡された。ところでこの辺で読者諸君が、われらの主人公おかえのこれら二人の従僕と馴染みになっておかれるのもあながちよいなことではないであろう。もっともそうは言っても、この連中のことだから別に大した人物であるわけもなく、まあ二流、三流といったところなので、この叙事詩の本筋や原動力とはまるで関係がなく、たまたまちょっと触れるようなことがあっても、ほんの軽いかいなしにして行く程度にすぎないのであるが、しかし作者は万事を几帳面にしておくことが大好きなので、この点では自分はロシヤ人であるくせに、ドイツ人のように的確でありたいとねがう者である。が、それにしても、別段大して暇も場所もとるわけではない。何しろ読者諸君もすでに先刻ご承知のこと、つまり、ペトルーシカは旦那のお下りの少しだぶついた肉桂色のフロックを着て、こうした身分の人間のご多分にもれず、馬鹿大きな鼻と唇をもっていたという以上に多くをつけ加える必要はないからである。性質はおしやべりというよりは無口のほうで、その上、学問、つまり本を読むことに對して殊勝な心掛けまでもっていた。もっともその内容のほうには一向おかまいなしで、恣に身を焦がす主人公の獵奇譚だろうと、ただの初等読本や祈禱書だろうと、すべて一視同仁、要するに何でも手当たり次第のものを

いつも同じ注意力をもって読んでいたわけで、よしんば仮に化学の本をあてがったところで、あえて辟易するような男ではない。彼が好きだったのは本の内容ではなくて、むしろ本を読むこと自体、さらに言えば、本を読むことそのことの過程、つまり文字が集まっていくらでも限りなく言葉のできて行くということが好きなので、時にはその言葉の意味などはわからなくてもとんと痛痒を感じないのであった。この読書は主に控え室で寝台のふとんの上に寝ころがって行なわれたので、自然、そのふとんもそのために、まるでせんべいみたいにべちゃんこになってしまっていた。読書への情熱のほかに、彼はまた別個に特長的な面をなす二つの習慣をもっていた——着のみ着のまま、つまり例のフロックコート姿のまま寝ること、何となく俗臭を思わせる一種特別な空気を持っていることがそれである。自然どこでも、たとえそれが今まで人の住んでいなかったような部屋でも、一たび彼が自分の寝台をすえ、外套や手回りの物を持ち込みさえすれば、それだけでもうけっこう十年も人が住んでいたようになるのだった。チーコフはなかなか潔癖な、場合によっては気むずかしいと言ってもいいほどの男だったので、朝のすがすがしい鼻づ先へこの空気がぶーんと来るとやにわにもう顔をしかめ、首を振りふりなりつけたものだった——「おい、おまえはえらく汗くさいじゃないか。風呂へでも行って来りゃいいのに」。が、ペトルーシカは何と言われようと返事一つせず、さっさと何か仕事に取りかかろうとするのだった——旦那の燕尾服の掛かっているほうへブラシを持って近よってゆくとか、ただ何か片づけものをしかけるとかいふふうで。いったいこの男は黙っている時には何を考えていたものだろう。ひょっとすると肚の中ではこんなひとり言でも言っていたのではないだろうか——「だが、おめえさまもよっぽどおめでたいよ、一つことを百ぺんもくり返してよくも飽きねえもんだ……」。だがお邸のおかえ奴隷が主人から小言を頂戴しているとき、果たしてどんなことを考えているのか、こいつばかりは神さまでもご存じあるまい。だからペトルーシカについて言えること

も、さしあたってはまずこのくらしいところであろう。次に御者のセリファンだが、これはまたまるで違った人間で……。しかし作者は永年の経験で読者諸君がかような下層階級の連中と近づきになることを喜ばれないのを知っているので、こんな輩のことで諸君をいつまでも煩わすのは、はなはだ申しわけないと思っている。そもそもロシヤ人というのが元来そうした人間なので——つまり、自分より一級でも上の者とはやたらに近づきになりたがり、もしそれが伯爵とか、公爵でもあろうものなら、せいぜい帽子を上げて会釈をかわす程度の間柄でも、彼にとってはどんな親密な友だちづき合いよりもありがたいのだからしょうがない。で、作者もやっと六等官にしかすぎない本編の主人公のことでさえ実は心配しているくらいなので。読者がこれでも七等官程度の人たちならまだしも彼を相手にしてくれるかもしれないが、もう勳任級までたどりついた人々になろうものなら、それこそだれもが足もとに這いつくばっているものに対して傲然と投げつけるあのいかにも見下したような視線を投げつけるか、もっと悪くすれば、作者にとつて最も致命的な黙殺という手を食わされるか、全く知れたものではないのである。いずれにせよ、はなはだ芳しからぬことではあるが、さりとてやはり主人公のほうへ話をもどさないというわけにはいかない。さてこうして前の晩から必要な命令を与えておいて、翌朝、途方もなく早く目をさますと、彼はさっそく顔を洗い、そしてこれは日曜日だけにしかやらないことなのだが、ちょうどこの日が日曜にあたっていたので、頭の中から足の先まで十分水をふくませた海綿で念入りにこすったあぐく、さらに両の頬を、本物の繻子^{しよす}みたいにすべっこく、つやつや光るほどに刺り上げ、例のこけも色のピカピカした燕尾服を着込み、その上から大熊の毛裏外套をはおると、両側から宿の召使にひじをとられながら階段を降りて、半蓋馬車におさまった。馬車はガラガラと響きを立てながら、宿の門から町へと駆け出した。通りすがりの牧師が帽子をとり、きたないルバーシカ姿の子どもが四、五人「旦那さん、孤児に恵んでくんない！」と手を差し出

した。御者は、その中の一人がいやに後ろの馬丁台に乗りたがっているのを見てとつて、いきなりびしりとそいつに一鞭くれた。そして馬車はガタガタと跳ね上がりながら石ころの上を走って行った。ところどころた石の舗道もほかのもろもろの苦痛とひとしくやがて終わりに近いことを知らせてくれる縞模様^{しまもよう}の関門の標識がはるかに遠くに見える出したのもまんざら悪い気持ちではなかった。で、それからもお幾度か、かなりこびどく車体に頭をぶつけてから、ようやくのことでチーチコフは柔らかな地面にたどりついたのであった。がきて、どうやら市がうしろになったかと思うと、もうさっそく、これがわれわれの習慣というやつで、道の両側の愚にもつかぬ情景を、やれ丘がある、樺林がある、若松の低いまばらな茂みがある、古木の焼け残った幹がある、野生のヒース^{（えりか属）}がある、といったたわ言みたいなことを述べ立てなければならぬのだから閉口だ。紐^{ひも}みたいにならだと延びた村落も現われたが、その建物ときたら、まるで古新でも積みかさねた上に灰色の屋根をおつかおせたふうで、屋根の下には刺繡^{ししゅう}手ぬぐいをぶらさげたようなかっこうの木彫りの裝飾が施されてあった。例によって数人の百姓が羊の毛皮外套にくるまり、門前の床几に腰をおろしてあくびをしていた。上の窓から丸々とした顔つきで胸元をしばった百姓女どもがのぞいているかと思えば、下の窓からは横顔を出したり、豚どもが目も見えないくせに鼻面を突き出したりしていた。要するにありふれた景色である。十五露里目の里程標を通過したころ、彼はマニローフの言葉だとこの辺がその持ち村のはずなのを思い出した。が十六露里目の里程標も瞬間にすぎたのに村らしいものは一向に見えて来なかった。だからもしこれで途中で二人の百姓に出会わなかったら、果たして無事に行き着いたかどうかはあやしいものである。「ザマニローフ村はまだ遠いかね？」——という問いに對して、二人の百姓は帽子を脱ぎ、中でも幾分利口そうな顔つきの、楔形の顎ひげをはやしたのがこう答えた——「そりゃ、おおかたマニローフカのこんで、ザマニローフカでんじゃあんめえ？」